

歴史ライブ

四郷隆盛

福武書店

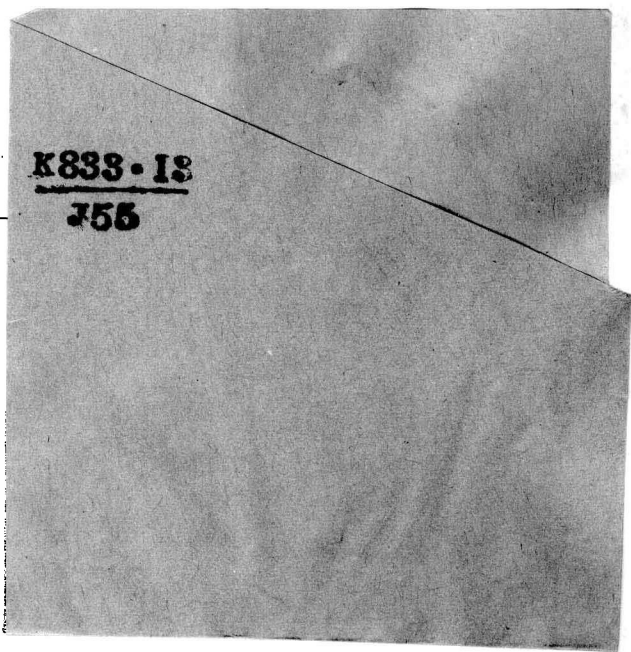
編集・ディレクション	植田博文・黒坂勉・宇野恵信・武隈恵里左・河田美智子
装丁・アートディレクション	浅葉克己
カバー撮影	篠原邦博
カバーモデルメイク	木下ユミ・丸山良
カバーモデルカットラ	水口誠也
カバーモデル衣裳	森良夫
レイアウト	山本昌美(浅葉デザイン室)・吉川俊夫・秋秀人
本文写真撮影	峰村孝
本文さし絵	加藤孝雄
取材協力	鹿児島市立美術館・平凡社

歴史ライブ 西郷隆盛

昭和59年4月10日 初版発行

定価 1,400円  
 監修者 尾崎秀樹・福田紀一・光瀬 龍  
 発行者 福武哲彦  
 編集責任者 雨宮良夫  
 発行所 株式会社 福武書店  
 東京都千代田区九段南2-3-28 〒102  
 電話 03(230)2131  
 振替口座 東京9-37119番  
 印刷・製本 大日本印刷株式会社

© Fukutake Publishing Co., Ltd. 1984  
 シリーズコード ISBN4-8288-0300-9 C0321  
 品名コード ISBN4-8288-0309-2 C0321  
 NDC210 192pp. 25.7×18.2cm  
 落丁・乱丁本はお取替え致しますので、当社までお送りください。



歴史ライブ

# 西郷隆盛

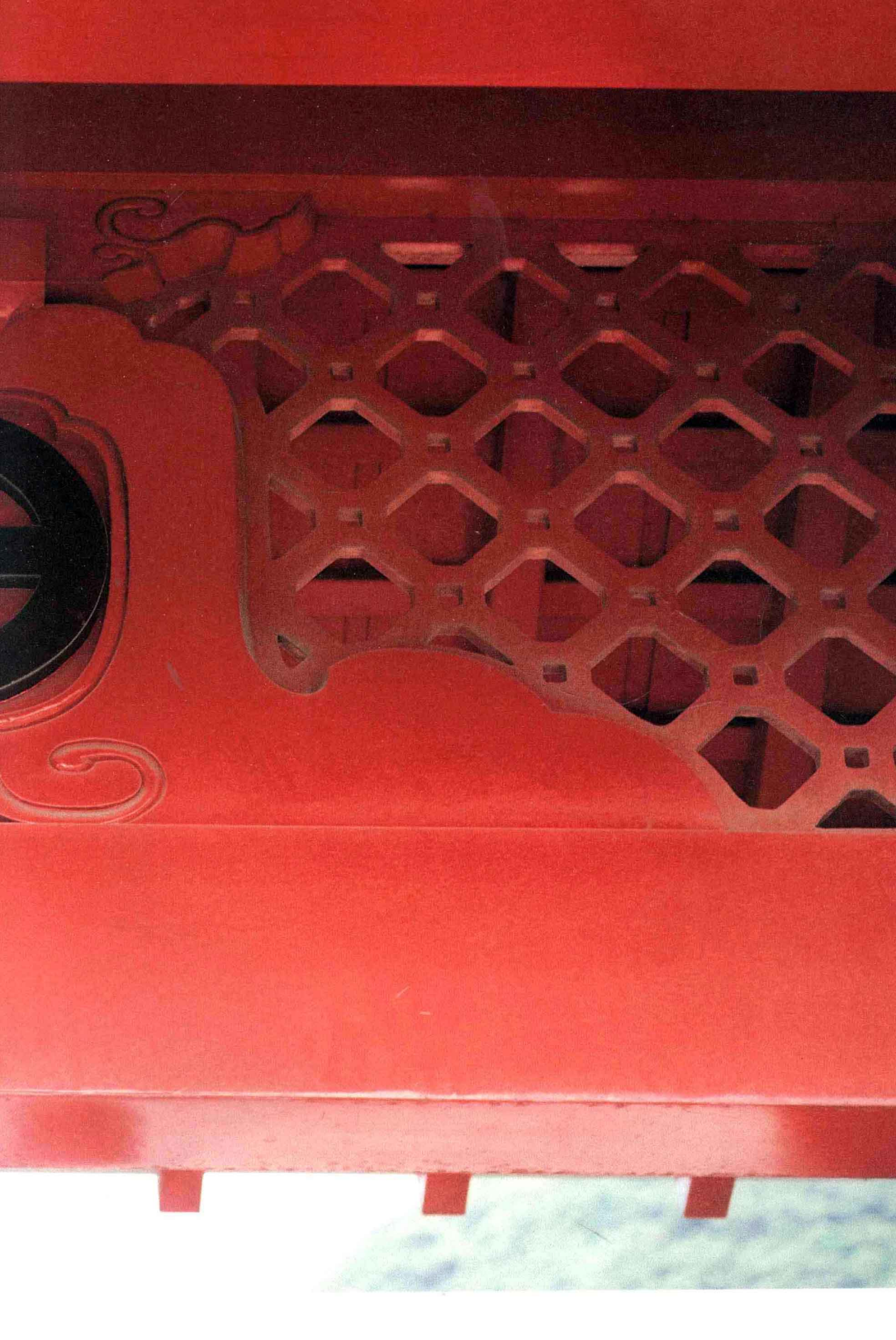
福武書店

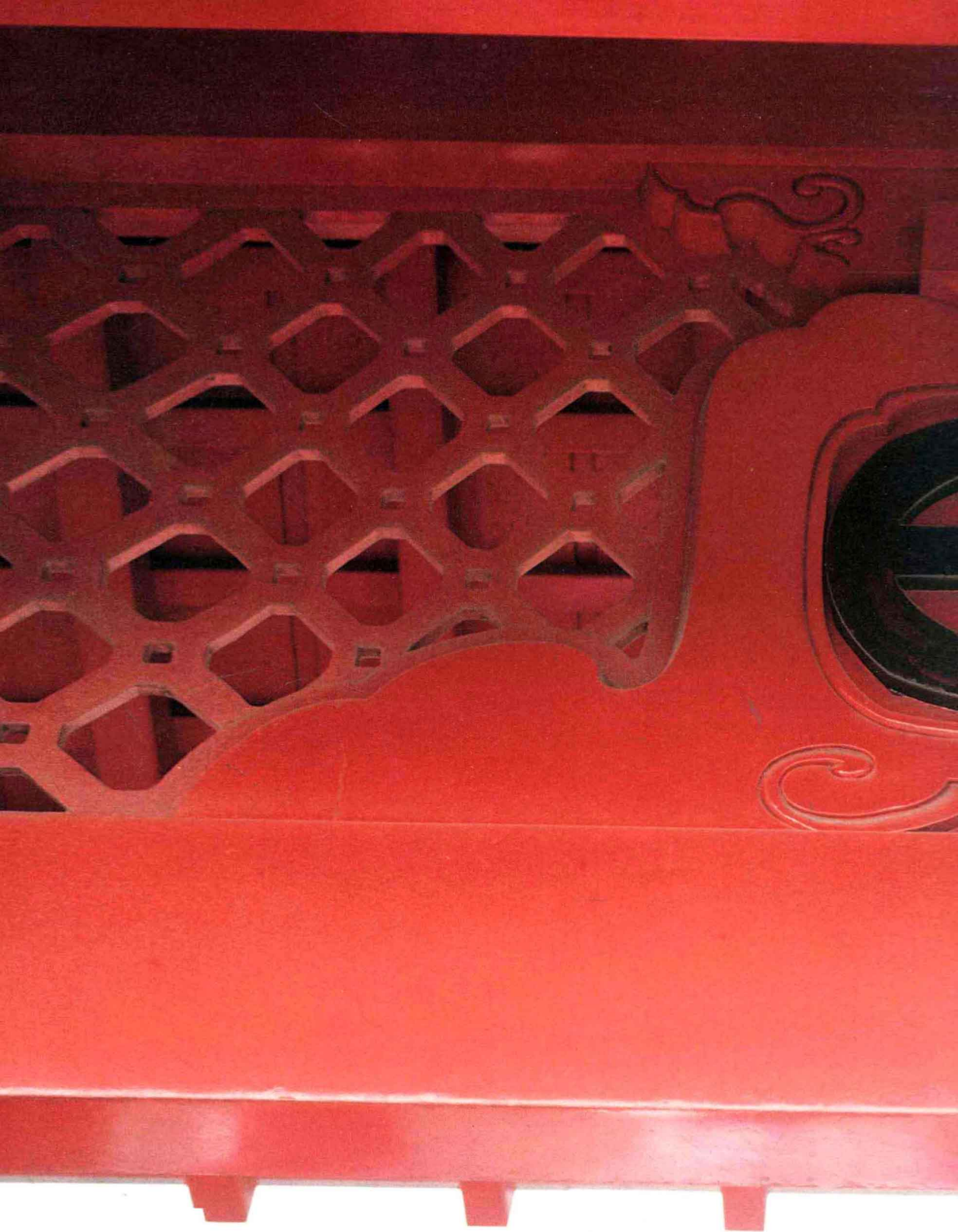




桜島が、燃える心のカタチになった。

文政10年(1827)、西郷吉之介は鹿児島<sup>ぶんせい</sup>の城下に生まれた。目の前にはいつもあつい噴煙をあげる雄大な桜島の姿があった。日に七度色が変わるというこの活火山を眺めつつ、貧乏藩士の小作<sup>せがれ</sup>は、身の丈180センチ116キロの薩摩隼人<sup>さつまのしゅうじん</sup>に育つのである。





たった一つの地球儀が、世界を変えることもある。

西郷が藩主島津斉彬しまづなりあきの目にとまったのは安政元年(1854)、28歳の時である。この英明な主君によって西郷隆盛の目は、世界へと開かれることになる。2人の結びつきはたった4年にすぎなかったが、隆盛の斉彬に対する敬慕の念は生涯消えることがなかった。



死の淵の向こうに、小さな休息があった。

齊彬が急死したのは安政5年(1858)隆盛は絶望し僧月照と入水するが、死を果たすことはできなかった。菊池源吾きくちげんごと名を変えて奄美大島あまみに流された隆盛は、やがて島の娘愛加那あいかなをめぐり二子をもうけた。それは波瀾に富んだ生涯のエアポケットのような3年だった。









南の島に、夢はあったが、希望はなかった。

娑婆の空気は4ヵ月だった。せっかく大島から召還された西郷だったが、藩の実権者である島津久光とはツリが合わず、再び島送りの身となった。徳之島から、さらに遠方の沖永良部島へ。領海の果てに打ち捨てられた今度こそ、還れる望みはほとんどなかった。



人が人と戦い、人が人に惚れる、それが歴史。

もし西郷が勝海舟とめぐり会っていなかったら、江戸城は灰となっていただろう。江戸城総攻めを明日にひかえた慶応4年(1868)3月14日、西郷は勝と会見し総攻めを中止する。2人の巨人の手によって、江戸の町は救われたのである。この時西郷は人生の頂点にいた。





風と光と土を、返してほしかった。

明治6年(1873)、下野した西郷は鹿児島に帰ってきた。権威も栄誉も捨て、粗末な狩衣を身にま  
とってひたすら土に生きようと望んだのだ。しかし時代は、この「維新の立役者」を放っておこうとはし  
なかった。西南の役は西郷をまさ込み、ついに彼も熊本へ向かう。









若者は、いつも先に死んでゆく。

田原坂。17日間ここで血が血を洗いつづけた。戦略も戦術もない。あるのは世直しの熱い理想と大西郷への不滅の信念、そして高らかな突撃ラッパだけだった。次々に築かれてゆく屍の山。しかし西郷には何もできない。彼は彼の命を、若者たちの手にゆだねたのだった。